

マスコミが取り上げない視点から経済と金融を語る、山好き金融マンのブログ「金融そして時々山」。そのHPを運営する元銀行役員で神戸大学山岳会会員の酒井さん。三井信託銀行を皮切りに金融界の最前線でバンカーとして長年活躍し、同時に山にもエネルギーを注ぐ。その生き様を聞いた。

—山（自然）との出会いの経過は

私は牛若丸で有名な鞍馬山の近くの京都市左京区岩倉という田舎に生まれました。そんな環境でしたから、子供の頃から裏山を歩いていました。自然に山歩きに親しんでいたという感じですね。ひとつ覚えてるのが、子供の頃、井上靖さんの『氷壁』をラジオで聞いて「山っておもしろそうだ」と思った記憶があります。それに中学校で林間学校があり、それも山に入るきっかけだった。だから高校時代からは京都の北山、比良山系などを友人と歩きまして、次第に本格的になりました。この頃は独学で岩登りの3点支持を勉強し、沢登りを始めた時期です。比良山系のヘク谷、奥ノ深谷などを登りましたね。だから大学に入学したら山岳部に入ろうと決めていまして、すぐに入学しました。

—大学の山岳部生活は

山岳部時代は夏山、冬山、春山、トレーニングなどで年間数十日を山

●三井CMリース取締役・常務執行役員

酒井利直さん

連載
山が
好き
⑤



よき山やである前に
よき社会人であれ



上・1974年、第1次カラコルム遠征隊（後列右端）
下・06年、谷川連峰西ゼンで沢登り

で過ごす生活でした。劔岳などあちこちの山に行きましたが、国内で印象に残る山は、2週間ほどかかった3月の越後駒ヶ岳から中ノ岳・平ヶ岳を經由し尾瀬までの縦走です。これはバイオニアワークの極致という感じでよかったです。その他、東北・朝日岳の岩井又川沢登りなどもバイオニアワーク的でよかったです。大学山岳部はどこでもそうでしょうが、岩登りよりもバイオニアワークに重点を置いていましたからね。だから滝谷を登るにしても下の蒲田川から溯行し、雄滝・滑滝を經由し、比較的易しい4尾根を登るとい感じですね。

—当時を振り返って思い出の山は

大学最後の1974年に行ったカラコルム・シエルピカンリ峰（7380m）です。第1次隊メンバーとしてのカラコルム遠征で行ったのですが、登れなかった。でも思い出深いですね。結局その山には2年後、うちの大学の隊（神戸大学カラコルム遠征隊）が初登頂しました。

—激務の金融界に就職した理由は

三井信託の先輩で一橋大学山岳部OB山本健一郎さん（故人）という方がいまして、彼が就職案内パンフレットに会社を休んでヒンドウークシュに行った話を書いていたのでこんな方がいるのだったらこの会社に入っても山に行けるんじゃないかと思っただけです。それが選んだ理



06年2月の日光奥白根山頂上直下



05年12月のハヶ岳連峰・硫黄岳

由です。京都支店に入社後、山本さんにその話をしたら、喜んでいただき、神田の中華料理屋さんで餃子をご馳走してくれましたよ。山本さんはバードソルたちによるミニヤコンカ初登頂の記録を邦訳されて、平成

10年出版されています。一般的に金融業界の人は山登りと縁がなさそうに思われるかもしれませんが、うちには他にも大先輩がいます。深田久弥氏とも親交があり、ともに『ヒマラヤの高峰』を著した、北海道の山に詳しい望月達夫さんです。

―就職後の山は―
入社後4年間ほどは大学の同僚や後輩と年間20日くらいは登りました。その頃、利根川源流溯行などにも行きましたね。90年から95年までニューヨーク支店勤務になりまして、ちょうど30代後半から40代前半あたりですが、その頃はスキーくらいはやりましたが、もっぱらゴルフで、山から遠ざかってしまいました。

―再開は？―
45歳前後、95年に帰国してからですね、ボツボツと登山を再開したのは。帰国後、名古屋駅前支店の支店長として単身赴任したんです。単身というのは休日が暇です。だからこの時間を利用して鈴鹿の山でも歩いてみようかと思い、名古屋駅で弁当買って近鉄に乗って御在所岳を目指して出かけたんです。ところが汗はボタボタ状態。後から登ってくるおばちゃんに励まされる状態。体力がなくなつたと実感しましたね。「昔とつた杵柄」じゃダメだと思い、夏冬の装備を一新して登り出したんです。ちょうど後輩が沢登りをやり

たいというので、奥多摩の逆川に行ったりしてからが本格的再開ですね。

―現在トレニングは？―
6、7年前から街のスポーツジムに週2回ほど通っています。1時間走り、後は筋トレですね。トレニングすると山でも違いますね。だんだん楽になりました。

―50歳の山は？―
エリア的には近くの奥多摩に行く機会が多いですし、スタイルとしてはスキー登山が多いですね。沢登りのエリアとしては谷川岳周辺が多いですね。西ゼン、白毛門沢、ゼニレ沢などです。

―山の位置づけは？―
いろいろな生き方があると思いますが、私は人生を4本柱で捉えています。個人としての自分、個人としての自分、個人としての自分が私の場合は山登りということになります。そのバランスが大事で、仕事忙しいときに無理して山に行かなくてもいいじゃないかと思いません。

確かに仕事のストレス解消になることもありますが、ストレス解消が目撃ではない。谷川岳の初期の岩登りなどに活躍された神戸大学教授の故・高木正孝さん(編注・日本山岳会のマナスル登山で中心的役割を果たし、58年神戸大学山岳会のパゴニア探検では登攀隊長としてアレナレス峰初登頂に成功した日本有数の登山家)という方がいまして、彼の教えの中に「よきマウンテンアである前によき社会人であれ」というのがあるんですよ。それが遺伝子になっているのかもしれないね。

―これからの予定や夢は―
自分で「雪の50名山」というのを作っており、スキーしながら日本の名山に登りたい。例えばまだ登っていない東北の鳥海山などです。還暦を間近に控えながら金融業の激務の最中、山登りに邁進する酒井さん。お話ししているだけで山登りへのモチベーションを分けてもらえた気分であった。(敷島悦朗)

さかい・としなお

1950年5月21日京都生まれ。現住所は東京都西東京市。妻と娘2人の4人家族。神戸大学経営学部入学後、同大学山岳部に入部。74年にカラコルム・シェルピカンリ峰(7380m)第一次隊メンバーとしてカラコルム遠征。1975年三井信託銀行京都支店入社。90年から95年ニューヨーク支店勤務。銀行の主な職歴は国内融資・債券トレーディングなどを経て、国際融資業務などを担当。97年に市場金融部長、02年に執行役員(年金信託等所管)。05年三井アセット信託銀行退任。三信リース

(現・三井CMリース)常務取締役。現在に至る。

